

「いじめの底流」 大河内君事件その後・・・ より抜粋

産経新聞 平成7年7月7日から15日までの連載記事 青山学院大学講師 宇井滋郎

1 学校側の会見で感じた非常に大きな問題点は、「**子供へのラベリング**」が**問題を見失わせてしまった**ということです。つまり、先生は、大河内君もいじめグループと同じ仲間なんだとラベリングをしていましたね。これは先生が非常に陥りやすい落とし穴なのです。勉強ができる子は、すべていいように見えたりします。しかし、そういうラベリングが子供の本当の姿を見えなくさせています。

2 マスコミなどによる「教師批判」も背景にあると思います。例えば学校では、子供が責任を果たすことで人間関係を構築していきます。そして、「俺もまんざらでもない」「俺だってっこう役になっている」という自尊感情、充実感を伴った「楽しさ」が出てくるのです。しかし、マスコミはそういうことと、生徒の欲求のまま「おもしろおかしい」ということを同列に並べて、「学校は楽しくなければ行けない」と学校叩きをするんです。これが、**学校を隠蔽体質（本校にいじめはありません）におとしましている要因**でもあります。

3 先生というのは、子供にたくましく強く育て欲しいと願っているため、子供の気の弱さや、言いなりになる姿を受け入れることができず、いじめられやすい子という捉え方をしがちなのです。そうすると、いじめられる側にも原因があるんじゃないか、理想論（いじめられる側にも問題があるという発想はあってはならない）ばかり言っていて、ダメという気持ちになってしまうのです。**結果的に、子供は学校には相談できず、どんどん深刻化していく**のです。

4 最近の親は、「明るく伸び伸び育てる」という子育て感が相当に強いのです。しかしそれは、「勝手気ままに育てる」とことと同じなんです。それを、自主性を尊重しているとか、自立した子供を育てているというように錯覚しているのです。実はそれこそ、親と子供との関係が希薄になっている証拠です。親と子の間における厳しい対決のなかで子供が学ばなければいけない**「人間が生きる上で、こういうことは許せない」ということを親が避けてしまっている**のです。

5 今、突然に理想的なことはできないのですが、家庭でいうならば、例えば自分の部屋は自分で掃除をさせるとか、自分の食器は自分で洗わせるとか、自分のことは自分でやらせればいいと思います。それが体験なんです。学校も同じです。例えば、山へキャンプに行っても、掃除はやってくれるし、キャンプファイヤーの準備も片付けもしてくれる。お金で全部買えちゃうんです。これでは子供の心は育ちません。**学校も、家庭も、地域も、もう少し子供がひもじさを感じる体験をさせなければいけないんです**。これは、もはや手段ではなく目的です。そうすることが、子供の心に通じ、心の教育になっていくのです。

参考：社会問題化した「いじめ自殺・死亡」事件

1986年2月1日 中野富士見中学 鹿川裕史君 プロレスごっこ・教師4人も加わった葬式ごっこ
遺書「俺だってまだ死にたくない。だけどこのままじゃ「生きジゴク」になっちゃうよ」

1994年11月27日 愛知県西尾市立東部中学校 大河内清輝君 グループのパシリ・100万超の恐喝
遺書「もっと生きたかったけど。本当に何もかもがいやでした。もうたまりません」

「いじめ」を克服する16のポイント H24.10.31

「どうとくのひろば No. 9」元東京純心女子大学教授／全日本中学校道德教育研究会顧問 宇井治郎

- 1 いじめは、人間の「業」(醜い本性)に根ざすところがある。だから、「きっかけさえあれば、どの学校(集団)でも起こる可能性がある」という共通理解が成立しているか。
- 2 いじめは、基本的人権に関わる問題であり、非人間的な行為であって、絶対に許さないという指導の徹底に努めているか。
- 3 いじめは、学校内の人間関係、集団形成の未熟さに起因すること大であり、学校教育の根幹が問われる問題だという、教師の認識が明確になっているか。
- 4 いじめではないかと疑われる問題について、学級担任だけに任せるのではなく、組織として対応する具体策が確認されているか。(言葉だけでは行動につながらない)
- 5 巧妙に偽装するいじめを、一般的、表面的指導で対応し、児童生徒の学校・教師に対する不信感や無力感を増幅させる結果を招いていないか。(表面的指導とは：危険なことをするな、些細なことを気にするな、いやなことははっきり断らなければ駄目だ、など)
- 6 「ふざけっこ」「ごっこ遊び」だと言い繕う場面では、「遊びの本質」が機能しているか、つまり「①メンバーの参加資格が平等」であること、「②役割の交代が保障」されていること、それを見抜くために遊び集団を教師の確かな目と素早い判断で見極めることに努めているか。
- 7 「いじめられる児童生徒」にも、それなりの問題があるという教師の考え方や指導は、絶対的な誤りだという指摘に、全教師が納得しているか。(相談や訴えを受容する教師の構えを)
- 8 「いじめられている本人」の思い込む深刻さ、追い詰められた恐怖感・屈辱感、誰も助けてくれない不信感・閉塞感への共感を持ち、親身になって、訴えを聞くことに努めているか。
- 9 「いじめられている本人」は、川に落ちて溺れている子どもと同じ。発見し、有無を問わず助け出すこと、健康を取り戻すことが先決問題だという共通理解が成立しているか。
- 10 「いじめを傍観する児童生徒」も加害者であり、見て見ぬふりをするなど自分の保身だけでは、人間の生き方として卑怯であり許されない態度だという指導の徹底に努めているか。
- 11 「いじめる側の児童生徒」も、背景に問題を抱える、現代社会の被害者だという教師の考え方が、加害者の責任を曖昧にするといった指導の誤りを招いていないか。
- 12 児童生徒がどのように「ソーシャルネットワークワーキングサービス」(SNS)に接しているか、他人を傷つけるような書き込みをしていないか、「セーフティ教室」などの取り組みを通じて指導の徹底に努めているか。
- 13 「個性を生かす教育」を推進して、一人ひとりが自己を発揮する生活態度は、いじめる側の主観からすれば、「気に障る存在」「目障りな相手」と映る場合があり、いじめの対象になり易い矛盾が潜んでいる。この矛盾を見抜くための組織的な情報交換がなされているか。
- 14 職員会議などで、いじめや生徒指導上の問題について具体的な対応策を話し合うとき、一部の教師の固執する主張が、問題点を拡散させ、全校的な取り組みの足を引っ張る結果を招いていないか。
- 15 生徒指導上、「面倒ばかり起こす子」「手のかかる子」など、いじめや問題行動を繰り返す児童生徒を排除したい迷いがないか。
- 16 親に言えない追い詰められた子どもの思いを推理し、家庭と学校の連携に努めているか。(中2女子の声「親に心配かけたくなかったから」「原因はお前にもあるのではないと言われるのが怖かったから」「クラスで嫌われていることを家族に見抜かれたくなかったから」)